当たり前となっていることにも理由があること
―少年院生活を送る中学生への現象学的アプローチ―

Realizing that there is a reason in what's already known
― Phenomenologically based approach to a junior high-school student referred to juvenile training school ―

小　澤　　豊
Yutaka OZAWA

目　　次

1　はじめに
2　研究対象
3　研究倫理及び方法
4　パスをもらうこと
5　授業を受けること
6　聞き耳を立てること
7　おわりに

1　はじめに

この論文が目指すのは、少年院での生活を送る中学生の男子少年が、そこで勤務する職員や共に生活する少年たちとの関わりの中で、これまでの自分を振り返り、今の自分を感じ取り、これからの自分の在り方を見出す過程を、本人の語りを通して描き出すことである。

少年院とは、少年法に定める保護処分制度の一つとして、非行のあった少年（以下「非行少年」という。）に対して教育や社会復帰に向けた支援を行う法務省の機関である。筆者はそこで勤務する「法務教官」という立場で、これまで多くの非行少年の処遇に携わり、彼らの立ち直りの過程を間近で見てきた。

彼らが非行に至る背景や要因には、個々人の性格特性のほかにも、その生育環境や交友関係、挫折経験等がある。少年院に送致されるまで彼らが過ごす少年鑑別所では、心理技官が各種検査や面接を行い、非行に至ったこれらの要因を明らかにし、再非行防止に向けた今後の処遇方針を提示する。「鑑別結果通知書」と言われるこの資料は、少年審判が行われる家庭裁判所に送付されるが、少年審判において少年院送致が決定した後は、送致先の少年院にも送られ、教育計画の策定に役立てられる仕組みとなっている。

このように、少年保護法制を取り巻く関係機関において非行少年の理解の中心にあるのは、当然ながら非行そのものであって、アプローチの仕方として、非行が発生する機構を明らかにするための方法が採られることが多い。

一方、研究分野においては、近年、立ち直りの観点から非行少年を理解しようとする試みが進められている。例えば、法務総合研究所では、少年院出院者のうち少年院に再入院することがなかった者を対象として約４年間に渡る追跡調査（アンケート調査）を行い、彼らが再犯に至ることなく社会生活を継続することができている要因（更生要因）を明らかにするという、マクロ的な見地に立った研究が行われている。この研究によると、良好に立ち直っている群（デシスタント群）の特徴として、自己肯定感や自己制御力が高いこと、また、少年院や保護観察を受けたこと等マイナスの出来事を含めた全体としての経験が、現在の良い自己の形成に関わったとの認識になっていることが挙げられるという（注1）。

本研究は、立ち直りの過程から非行少年を理解しようとする意味では、この研究と立場を同じくするが、一方で、そのアプローチの仕方は、統計的手法ではなく、あくまで個へのアプローチを採るものである。

なお、本研究における見解は筆者個人によるもの

であって、少年院を所管する法務省矯正局によるものはないことをあらかじめお断りしておく。

２　研究対象

本研究の対象者は､中学生の男子少年Ｓ君である。

今回少年院送致に至る事件を起こすまで彼には非行歴が全くなかったのだが、とある出来事をきっかけとして小学校高学年時から不登校となり、数年に渡り自室にひきこもっていた。

少年院に入院した頃のＳ君は、年齢と比べて小柄で、本人は伝えようとしてはいるようがその声は聞き取りづらく、内面の変化を窺い知ることが難しい印象のある少年であった。

当時、筆者は教育・支援部門の監督者という立場にあり、現場で指導する職員から報告を受けたり、日記や課題作文を読むなど、Ｓ君とは間接的な関わり方であったのだが、その線の細さや表現力の乏しさに、社会復帰後の生活どころか、集団生活を基本とするここでの生活自体を問題なく送らせることができるのかと心配していた。

そんなある日、彼の日記には、次のような記載があった。

「今日は数学の授業がありました。（中略）先生から、連立方程式が分かるかと言われたのですが、そんなの知ってるよ、と思いました。」

（下線部は筆者が引いたもの。以下、同じ。）

職員や他の少年に対して自己主張する場面はまずなかったＳ君が、反発心の片鱗のようなものを窺わせたことに、筆者は驚いた。それから数日後の日記にはこのような記載もあった。

「今日は地理の勉強をしました。（中略）地球儀を見て、地球には丸みがあるんだなと初めて知りました。」

普段は、「今日は○○がありました。その後、△△をしました。」といったように、出来事の羅列ばかりだったのだが、感受性をありのまま記すようなその日の日記に、筆者は何か特別なものを感じた。さらに、地球は丸いという誰もが知る事実を「初めて知った。」と書いている部分には、不可解さを感じた。

こうした筆者の驚きや不可解さをよそに、Ｓ君はその頃を境として、職員や他の少年に進んで話しかけ、時には提案するなどの場面が見られるようになった。特に家族との面会の場では、これまで心配をかけさせてきたとの反省の思いや、本件非行に対する謝罪の思い、さらに将来は高校に進学したい、そのための支援をお願いしたいとの思いを伝えることができていた。実際に彼は、その後、高校進学に向け受験勉強に励み、少年院在院中に合格するに至っている。

数年にも渡って家族や学校から距離を取り続けてきたＳ君が、非行をして送致された少年院でどのような思いで生活していたのか、そして立ち直りの契機となった出来事はどのようなことだったのかに関心を抱いた筆者は、当の本人から聴くべく本研究に着手したのである。

３　研究倫理及び方法

（１）研究倫理

「少年院での生活を通じて思い出深かった出来事を聞き取り、職員の関わりが少年たちに与える影響を調査する」とする本研究の趣旨を、Ｓ君とその保護者に伝えて同意を求め、両名から書面で承諾を得た上で、個人情報の管理も含め、部内での研究倫理基準に合致していることを確認した後、本研究に着手した。

（２）研究方法

義務教育を終了しておらず、非行の問題性が比較的軽く、早期改善の可能性が大きいとのことで、Ｓ君は標準的な教育期間を20週間とする短期間の教育課程を有する少年院に送致された。

本研究では、20週間中、出院間近の19週目に３日間連続でそれぞれ20分から40分時間程度のインタビューを計３回行った。

インタビュー内容はすべて録音し、後日、筆者がトランスクリプトにし、これを現象学的アプローチで分析した。分析に当たっては、ヴァン・マーネンの提唱する、解釈学的現象学的研究に関する６つの活動を中心に据えた（注２）。

現象学的アプローチを採用した理由は次のとおりである。すなわち、先に取り上げたとおり、Ｓ君は授業の場面で印象深い出来事に遭遇したようであるが、本研究の関心にある「Ｓ君の立ち直り」の過程は、授業だけに留まらず、少年院の様々な場所や空間、関係の相互作用の中で培われたのであって、彼の経験を理解するに当たっては少年院生活という独特な時間や空間についての全体的な把握が必要であり、現象学的アプローチがそのために適切な方法であると考えたためである。

トランスクリプトからの引用部分の末尾に〈３〉といったように示した数字は原稿のページ番号を指し、１回目のインタビューは〈①３〉（「１回目のインタビューの３ページ目」であることを指す。）のように表記した。

なお、１回目分のトランスクリプトは全６ページ、２回目は７ページ、そして３回目は９ページであった。

４　パスをもらうこと

（１）その人にあった強さで

初回の冒頭でのインタビューの箇所で、少年院での生活を通じて思い出深かった経験として思い当たることを質問した筆者に対し、Ｓ君は体育指導で行われたバスケットボールを挙げる。

小：少年院での生活で、よかったなとか、明るい思い出っていうのはありましたか？
Ｓ：（しばし沈黙してから小声で）明るい思い出？
小：例えば、日記とかだと運動したことをよく書いてくれていたと思うんだ。
Ｓ：（小声で）バスケ。
小：バスケって得意だったの。
Ｓ：いや、やったことなくて。
小：そっか、ボール持ったのが初めてで。
Ｓ：いや、小学校の時に少し。
小：じゃぁ、何年か振りだろうね。久しぶりにボールを持った感じはどうでしたか。
Ｓ：（しばし沈黙が続いた後）意外に軽い。ていうか、軽い。〈①１〉

本研究の目的を事前に伝えた上でインタビューを開始したのだが、その冒頭で筆者の質問に戸惑いながら応じるＳ君の様子が窺われる。

バスケットボールの経験を聞かれたＳ君は、始めに「やったことなくて。」と応じるも、すぐに「小学校の時に少し。」と言い換えている。続けて、ボールを持った感じを問われると「意外に軽い。ていうか、軽い。」と、またもや言い換えている。

バスケットボールを振り返る時のＳ君はこのような言い換えが実に多い。小学校高学年時から自室にひきこもり、同年代との接触や、スポーツを通じての他者との交流を欠いた数年の間に、身体的な面での成長を遂げた現在のＳ君とすれば、今の状態ではバスケットボールを「やったことがない」のと同然であること、一方、小学校当時に思いを巡らすと、過去にはやったことがあること、と言ったように二つのイメージが彼の中に共存しているようである。

次に、Ｓ君はプレーについてこう振り返る。

小：ボールが当たったりして、痛くなかった？
Ｓ：あんまり。ちゃんと取ってたんで。
小：そうですか。それってテクニックとか、自分で判断した感じ？
Ｓ：いや、最初は普通に、他の人と同じような感じだったんですけど、だんだん、自分に合わせた強さみたいになってきて。
小：「自分に合わせた強さ」っていうけど、例えば「これくらいでよろしく」みたいに言うわけじゃないよね。なんか、いい感じというのを感じることはあった？
Ｓ：はい。
小：例えば誰？
Ｓ：（だいぶ間があってから）みんな。
小：この人辺りから始まったみたいなことはありますか？
Ｓ：なんか、先生が「その人に合った強さでやってください。」みたいなことを言って。
（中略）
小：Ｓ君自身は先生から言われたことを自分の中に入れて、工夫したことはあった？
Ｓ：自分の普通の強さだと、相手は全然強くないから。だから、たぶん、普通でやっていたと思います。〈①２〉

小柄なＳ君は身体能力に秀でているようには見えず、筆者も含め、職員の多くが心配していたのだが、

ここでは、他の少年たちほどの強さでボールを投げることはできなかったということを、S君も自認していたことが分かる。そうであれば尚のこと、「少年院生活での明るい思い出は何か。」との質問に対し、S君がバスケットボールの場面を取り上げたのには、どのような理由があるのだろうか。

彼の発言に特徴的であるのは、「ちゃんと取ってたんで。」と、自身のプレーを主体的な表現を用いて振り返りながら、並行して「その人に合った強さでやってください。」との職員の指導をきっかけとして、他の少年たちから配慮してもらい、彼らからパスされるボールが自分に合わせた強さへと変化していくのも感じられたと振り返っていることである。

後に続く３回目のインタビューでは、当時、集団生活を共にしたK君に憧れていたことを明かし、K君からのパスを受け止める時の感じ方は中でも特別であったと話している（注３）。

S：K君が、運動がすごいできて。それで、自分も、なんか、うまくなりたいなぁって。
小：具体的には彼は何が得意だったの？
S：なんでも。
小：K君ともバスケットしたよね。どう？
S：なんか自分に合わせた強さで。（中略）他の人はみんな、自分よりは強かったです。
小：K君はスポーツができるよね。僕もそう思っていたよ。あと、力もパワーもあるし足も速いし。（中略）でも、ボールは弱かったって感じ？
S：いや。
小：弱くはなかった。
S：（沈黙した後）取りやすい。　〈③５〉

「自分に合わせた強さ」という言葉がここでも用いられている。

S君にとって少年院でのバスケットボールは、小学校の時のようにはいかず、まるで初めてしたかのようにも感じられる経験であった。彼のプレーに周囲からの遅れを感じた職員は、「その人に合った強さ」でプレーするよう少年たちに指導したのだが、その指導に呼応した少年たちは、S君にとって取りやすく、まるで「ちゃんと取っていた」と感じさせるようなパスを送っていたのである。

そして、S君の側もまた、「ちゃんと取っていた自分」も、「自分に合わせた強さ」でパスをしてもらったことも、等しく受け入れるのである。

（２）自分もつられて拍手して

ここまでは、周囲の少年からもらうパス場面に注目してきたが、S君は自分がシュートした時の周囲からの反応にも感じるところがあったと話している。

S：シュートはけっこう楽しく。
小：そうだね。シュート何点か入ったの？
S：はい。
小：スポッと。
S：はい。いや、なんか、近いよりも遠い方がよく入りますね。
（中略）
小：それじゃあ、すかっとするね。
S：はい。
小：小学校の時ぶりなのに。周りは何か言ってくれたの？
S：なんか、そんなに。（思い出すように、沈黙してから）「おおぅ」みたいな。　〈①４〉

身体接触の場面が多いバスケットボールのプレーでは、S君にとって緊張感を伴う場面が数多くあったと推測される。

そんな中にあって周囲の少年たちから配慮してもらい、プレーに加わっていた彼にとって、シュートを決めた時の周囲からの「おおぅ」というどよめきに感じるところがあったことがここでは語られている。

S君の発言にある「近いよりも遠い方がよく入る。」という、一見矛盾したような箇所が気になった筆者は、さらに質問する。

小：社会では「おおぅ」って言われた思い出ってあります？
S：なんか、小学校の時に、あんまり運動できない自分っていうのが、ソフトボール投げで、けっこう飛んで。
小：ああ、遠投だ。
S：はい。
小：さっきのバスケットボールと似ているかもね。何か君にとって嬉しかった言葉はありましたか。
S：いや、けっこう、あの、同じように遠くから

投げて入ったときとか、みんな「おおぅ」みたいな感じになって。自分も、つられて。
小：なんて言ったの？
S：まぁ、雰囲気が盛り上がって。
小：はいはいはい。
S：その、拍手して。
小：バスケットボールで拍手が出るんだ。どんな感じ？
S：（少し微笑んで、パチパチパチと拍手をして見せる。）〈①5〉

S君は遠くからシュートを決められるほど上手であった訳ではないのだから、彼がここで語る「近い／遠い」は、ゴールネットまでの実際の距離を指しているだけでないようである。S君は小学校当時の遠投（ソフトボール投げ）の場面で周囲からどよめきがあった経験に、バスケットボールの場面で聞こえたどよめきを重ね合わせているから、遠い方がよく入ったと感じているようである。

シュートが決まった時の驚きと称賛が込められた周囲のどよめきや拍手の中で、気恥ずかしさもあったのだろうS君は、周囲がしてくれたことを自らもしてみせた。そのようにして、S君は周囲の少年との交流を深めていったのである。

5　授業を受けること

（1）順番に教わる

2回目のインタビューでは、冒頭に取り上げた日記の内容を念頭に置きながら、筆者は授業での思い出に話題を向ける。

小：教科の授業、国語とか数学とか理科とかで、やる気があるとかということはありましたか？
S：やる気があったのは、やっぱり英語です。
小：あ、英語なんだ。目覚めた感じ？
S：なんか、意外と、今までは一人で教科書見て勉強する感じだったんですけど、先生から教わると、なんか分かりやすい。
小：先生とのやりとりの中で「英語ってこういうことだったんだ。」みたいなことは覚えていますか？
S：今までは色んな言葉を、まぁ、教科書見ながら、ただもう、頭に入れていってって感じで、まぁ、色んな言葉がごちゃごちゃになって、あんまり分からなかったんですけど。ここでは1年生の最初から教えてもらって。順番に、なんか教わった。
小：そうかぁ。君からすると中学校の教科書の一番最初からだから、もしかしたらつまらなかったというのもあったの？
S：いや、英語は全然わからなくて。けっこう新鮮さがあって。〈②2〉

S君は、バスケットボールを「意外に軽い。」と応じたのと同じように、「意外」という言葉を用いて、英語の授業を「意外と分かりやすい。」と振り返り、その理由を「順番に教わった（から）」と語る。

事実関係として補足すると、S君は当時、他の男子少年と共に授業を受けていて、実際に教科書の始めから教えてもらっていた訳ではない。では、彼の語る「順番に」という言葉には、どのような意味が込められているのだろうか。

ひきこもる生活の中で、彼は教科書や学校から配付されるプリントを眺め、自室で一人勉強していたのだろう。教師からの発問と説明、生徒同士の学び合いの中で自然と解消されていくような小さなつまずきや疑問はふくらむばかりで、「色んな言葉がごちゃごちゃになって」いく、そんな当時の彼にとって、学びとは混乱の中、「ただもう、頭にいれてい」くものでしかなかったようである。そんな彼には、言語活動を促す体験的な英語の授業はとりわけ「新鮮」に映ったことだろう。

別の箇所では、「新鮮」と似た表現を用いてS君は国語の授業をこう振り返る。

S：（国語の授業では）その問題の答えは分かるんですけど、なんでその答えになるのかが分からない。
小：答えは選択肢の1番だっていうのは分かる。それで、先生はS君に質問したのかな。「なんでその答えになるの？」って。
S：まぁ、具体的に、文章と文章をつなぐ接続詞があるからこうだ、とか。そういうことを今まではしたことなかったんで。〈②3〉

選択肢の問題を解くに当たり、Ｓ君は職員から文と文を繋げる接続詞がポイントであるとの説明を受けた。前文が後の文の原因や理由となっていれば「順接（だから／そのため）」、前文から予想されることとは逆の結果となれば「逆接（しかし／だが）」となることは経験的には知っていたのだろうが、このことを授業として学んだ経験は、Ｓ君に強い印象を残したようである。先に取り上げた英語の授業での学びを「順番に教わった」と語るのと同じように、彼が国語の授業を「今まではしたことなかったんで」と振り返る背景には、それまでの混沌の只中にあった学びの活動が、授業を通じて新しい発見が得られ、塗り替えられていく様子が表れている。

こうしたＳ君の学びの変化を感じ取りながら、筆者は冒頭に取り上げた数学の授業での出来事を確認する。

小：日記の中で、数学の授業で「まだ分からないだろう。」って先生が聞いてきたんだけど、君は知っていて「知っているよ。」って言いそうになったって。
Ｓ：（沈黙）
小：「まだ分かっていないだろう。」って先生が言ったのは何故だったんだろうね。
Ｓ：たぶん、そろそろ授業する回数も少なくなってきて、まぁ、高校受験が近いから、たぶん、難しいのも教えないとと。
小：そうだね。受験ね。それで「分かんねぇだろ。」って感じだったんだ。
Ｓ：いや、一応、自分で、自分だけで勉強して分かった所なので、ちゃんとした先生から教えてもらって、それで（先生が）言っていることが、自分が勉強して分かったことと同じだったら、自分は勉強を間違えずにできていたっていうことだと思えて。
（中略）
小：自分は生意気だったのかなと思ったりするのかなぁ。
Ｓ：でも、たぶんそれぐらい自信があったんだと思います。〈②７〉

この数学の授業があったのは高校受験の直前であって、先に取り上げた国語や英語での出来事のだいぶ後のことである。連立方程式を自習してある程度理解できていたＳ君としてみれば、「まだ分からないだろう。」との職員の発言に一言物申したくなる気持ちも分かるところである。

だが、そのような思いを汲んだ発言をする筆者に対して、Ｓ君はそのような思いはなく、むしろ受験前に自らを鼓舞してくれたものとして捉えていると応じる。Ｓ君にとって自習済みである時の授業は、「ちゃんとした先生から自分で勉強した所を教えてもらって、間違えずに勉強できていたこと」を確認する場となっていたようである。

つまり、「そんなの知ってるよ。」との日記の記載は、反発心の表れなどではない。自室にひきこもっての孤独な学びから抜け出て、授業という安心できる環境の下で自習した成果を確認できていることを職員に伝えようとするＳ君なりの思いの表れだったのである。

（２）丸みを感じる

授業での学びとして「初めて知った。」とする地球儀の丸みについて、Ｓ君はこう振り返る。

小：地理の時間の話ですが、日記で書いてくれていたと思うんですけど、地球儀かな。丸みがあるんだって日記で書いてくれていて、へぇって思ったんだけど。地球が丸いことは知っていたよね。
Ｓ：はい。
小：ボールほどじゃないかもしれないけれど、丸いよね。なにか感じるところはありましたか。
Ｓ：今では当たり前になっていることでも、昔の人は丸いとか分からなくて。んで、なんか理由があるから丸いのかなって。〈②４〉

一見すると聞き流してしまいそうなＳ君の発言だが、そこには彼の見えている世界の広がり、現象学の用語を借りると『生活世界の地平構造』が示されている。すなわち、「地球が丸いことが知られている今」が「地球が丸いということがまだ知られていなかった過去」によって再び際立たされ、また、「当たり前であること」が「（学問的な）理由」によって再び際立たされるような経験の構造である。

地球が丸い事実をＳ君は知識としてすでに持っていた訳であるが、体育での他の少年との交流の深まりや、授業で得た自信などを通じて、自身の生活世

界の広がりを感じる中で、彼は改めて地球の丸みを「初めて見た。」ように感じるに至ったのである。

6　聞き耳を立てること

少年院での少年たちは定められた日課のもとで、日中は再非行の防止に焦点を当てた生活指導や、社会復帰に当たり働く意欲を喚起し職業上有効な技能を習得するための職業指導を、そして義務教育段階の少年は教科の指導を受けるなどし、夜間や休日は「寮」と呼ばれる場で共同生活を送る。寮の基本的な構造は、共有スペースであるホールとそれぞれの少年ごとに割り当てられた部屋を自由に行き来できる形態であり、そこでは職員と少年とが行動を共にしながら、少年たちはそれぞれの役割活動のもとで生活している。当時、S君はホールのすぐそばの部屋を割り当てられていた。

３回目のインタビューでは、余暇時間にあった出来事に話題が向けられる。

小：場面を変えて、ここでの生活で楽しかったなとか、見え方が変わったなというようなものがあれば教えてもらえますか。
S：集団生活は、あんまり好きではないんですけど、でも、たまに先生と他の院生が話したりしているのを聞いて、それを聞いているのがけっこう楽しくて。
小：君って何室が多かったんだろう。
S：○室（ホールに最寄りの部屋）です。
小：ホールで話している感じで合っているかな？
S：はい。
小：ホールで話しているのが部屋から聞こえるって感じかぁ。誰が誰先生に話しかけているんだろう。
S：K君。先生は誰だか忘れたんですけど、なんか、野球の話。
小：へぇ、野球。
S：世界野球という大会があって。そのことが新聞に載っていたって。
小：新聞記事のことを先生と話していたんだ。なんでそこにひっかかったんだろうね。
S：他の人の会話を聞いて、面白いって思うのが、それが初めてだったから。〈③２〉

見え方が変わったきっかけとしてS君が取り上げたのは、ホールから聞こえてくる誰かの会話という、ありふれた日常の場面であった。だが、その内容に着目すると、S君にとっては、ありふれた場面ではないことが分かる。

なぜなら、会話をしていた一人がバスケットボールで彼に取りやすいパスをくれたK君であったこと、そして話題になっていた野球には社会当時の特別の思い出がこめられていたからである。インタビューは社会当時のS君に話題が及ぶ。

小：世界野球って？
S：世界ランキングで上位のチームが戦う。
小：そっか。K君は先生に話しかけられていたの？それともK君が話しかけていたの？
S：話しかけていた。
小：君としては「お、お」とした。
S：はい。
小：少し社会での話をしようか。家では野球の話を誰かとしていたのかな。
S：学校に行っていた時には、お母さんやおばあちゃんとかとしていて。
小：学校に行かなくなってからは、誰かと野球について話すことはあったのかな。
S：していなかったです。
小：インターネットで野球は観ていた？
S：毎日。〈③３〉

学校に通っていた頃には家族での共通の話題であった野球が、自室にひきこもる生活が始まってからは、インターネットで毎日その結果を検索するものへと変化していった。野球への興味は変わらないものの、誰かと楽しみを共有する話題ではなくなっていたのだろう。

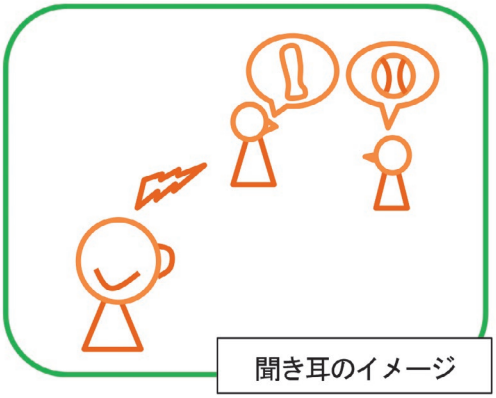
ましてや少年院ではインターネットで検索することも自由な時間にテレビを観ることもできず、S君の野球への興味は内に秘めたものとなっていったのだった。

そんな中で、憧れの対象であるK君が職員と野球の話をしていることが耳に入った時の心が躍るような感情は想像に難くない。彼はその喜びを「他の人の会話を聞いて、面白いって思うのが初めてだった。」と語るのである。

小：野球の話題をそうやって聞くと、なんか違うと思うんだよね。自分がやっているんじゃなくて、誰かが話しているのを聞いているんだしね。
Ｓ：他の人が野球のことを話していると、その人（Ｋ君）も野球が好きなのかなって。野球っていいなって。
小：なんか見え方変わったでしょ。Ｋ君に対する見え方。
Ｓ：はい。
小：声をかけるほどではないか。
Ｓ：話の、間に入っていくんで。〈③４〉

ここでは、職員とＫ君の会話に聞き耳を立てるＳ君の関心が、会話の内容もさることながら、Ｋ君や野球そのものへ向けられていることが分かる。ホールに出てきて、職員とＫ君の会話に入っていくほどの勇気までは持ち合わせていなかったとのことだが、しかし、部屋から二人の会話に聞き耳を立て、野球の魅力を思い出し、Ｋ君も好きなのかなと思案する彼の様子には、少年院に入院した当時の姿はすでにない。

Ｓ君は、部屋とホールという当時の彼にとってちょうどよい距離のもとで、他人に関心を寄せていくことができたのであった。



7　おわりに

少年院生活を通じて思い出深い出来事を聴く中で、Ｓ君の語りの全体に渡り表れていた言葉に「初めて」というのがある。

少年院で久々に参加したバスケットボールや、各種教科の授業、そしてホールでの会話に聞き耳を立

「初めてのように感じた」経験の構造

（場所）	体育		教室		集団寮
（具体的状況）	バスケットボール		授業		自分の部屋
（周囲からの関わり）	・Ｓ君に合わせたパス	・どよめきと拍手	・順番に教わる ・接続詞を学ぶ	・まだ分からないだろうと言われる	・ホールでＫ君が職員に野球の話をする
（Ｓ君の反応）	シュート	一緒に拍手	分かりやすい	知っているよと思う。	聞き耳を立てる
（「初めて」を指すフレーズ）	「やったことない。」		「新鮮」 「今までしたことなかった。」 「地球が丸いのを初めて知る。」		「他の人の会話を聞いて面白いって思うのが初めて。」
（きっかけ）	小学校当時の遠投		混乱の中で自習		野球の話題
（成長）	交流の深まり		自信		他者への関心
	【遠くからのシュートが入る】 ⇒自分もつられて拍手して。		【高校受験】 ⇒当たり前になっていることにも理由がある。		【憧れ】 ⇒Ｋ君も野球が好きなのかな。 野球っていいな。 Ｋ君が運動すごい。 自分もうまくなりたいな。

てることなど、場面ごとでその表現の仕方は変わるが、いずれの場面にも共通しているのは、Ｓ君の人生において実際に初めてというものではなく、むしろ彼の人生ですでに経験されていた出来事が、少年院での指導場面や生活場面の中で類似した出来事として繰り返され「まるで初めてのように感じられたこと」を意味していた。

これら主要なエピソードごとにまとめたのが、表のとおりである。

いずれの場面においても、職員からの指導や周囲の少年からの配慮のもとで、彼は過去（小学校当時／ひきこもる前の生活）の経験に少年院での今の経験を重ね合わせながら、そこでの生活全体を通して、立ち直りの過程を踏んでいることが分かる。

こうした経験の重ね合わせを「初めて（のように感じる経験）」として語るＳ君に、私たちは少年院に送致された非行少年が更生していく姿を見ることができるのである。

注

1　法務総合研究所2018「青少年の立ち直り（デジスタンス）に関する研究」を参照。

2　ヴァン・マーネン（1990）によると、解釈学的現象学的研究とは、次の６つの研究活動が互いにダイナミックに影響し合うことであるという。①我々が真剣に関心を持っている現象、我々を世界に関わらせている現象へと向かうこと。②経験を概念化するのではなく、我々がそれを生きるように経験を探究すること。③現象を特徴づけている本質的なテーマについて反省すること。④書くことと書き直すことの術を通じて、現象を記述すること。⑤現象に向けて、強くそして方向づけられた教育的関係を維持すること。⑥部分と全体とを考慮することで研究の文脈のバランスを取ること。

3　「Ｋ君」は、小澤（2017）で取り上げた少年と同一人物である。

参考文献

van Manen.Researching Lived Experience :Human Science For an Action Sensitive Pedagogy.State University of New York Press.1990『生きられた経験の探究－人間科学がひらく感受性豊かな「教育」の世界－』（村井尚子訳）ゆみる社 2011.

広田照幸ほか2012「現代日本の少年院教育 質的調査を通して」名古屋大学出版会

小澤豊2017「向かい合わせから山なりのパスへ－少年院在院者への現象学的アプローチ－」『学ぶと教えるの現象学研究17』